

氏名（本籍） 伊藤 彰（大分県）
 学位の種類 博士（音楽）
 学位記番号 乙第14号
 学位授与年月日 令和5年3月18日
 学位授与の要件 学位規則第3条第4項

学位論文題目 ヘルムート・ラッヘンマンの作品における音響による形式形成の
 分析的研究
 ——《動き（硬直の前の）》を事例として——

学位論文等審査委員

（総合審査）	委員長	准教授	瀬尾 文子
		教授	今村 央子
		教授	菊池 幸夫
		教授	早稲田 みな子
		准教授	三浦 雅展
		准教授	三宅 博子
		准教授	三宅 博子
（演奏審査）	委員長	准教授	瀬尾 文子
		教授	今村 央子
		教授	菊池 幸夫
		准教授	渡辺 俊哉
			近藤 譲（日本現代音楽協会 理事）
（論文審査）	委員長	准教授	瀬尾 文子
		教授	早稲田 みな子
		准教授	三浦 雅展
		准教授	三宅 博子
			沼野 雄司（桐朋学園大学教授）

審査結果の要旨

学位審査委員会は、申請者、伊藤彰（博士後期課程創作研究領域）の修了作品発表会、ならびに学位申請論文に関して厳正な審査を行った。以下に、1. 演奏審査、2. 論文審査、3. 総合審査の所見を記す。

1. 演奏審査

修了作品発表会は、申請者の本学での7年間にわたる探求の軌跡を鳥瞰する内容であり、類似性、近似性と差異をテーマとした五つの作品から構成された。順に、ギター、ヴィオラ、二十五絃箏による《好奇心ドリブン》、スネア・ドラムを中心にした打楽器3名による《Es》、ピアノ・ソロの《文体練習》、三味線、ギター、ヴァイオリン、チェロによる《17の弦》、バスクラリネット、アコーディオン、チェロによる《袖振り合うも多生の縁》。長さはいずれも10分程度である。

申請者は楽器の特殊奏法や微分音を駆使して斬新な音響を作り出すことに注力しており、どの作品においても、丁寧に彫琢された音響が聴き手の耳を惹く。特殊奏法は現代においては

もはや「通常」奏法だが、申請者はそれらの音響を注意深く「聴く」ことで新たな魅力を再発見し、それを核として独自の世界を紡ぎ出していた。それは紛れもなく、自己の研究を基盤としつつ、他者との交流・協働により発展させた成果と言えよう。各曲は互いに性格を異にするいくつかの音響の並置から成るが、特定の音響の再帰（あるいは一曲を貫く保続音）がそれらを一つの作品空間の中に繋ぎとめ、一作品としてのまとまりを実現する。そこには、申請者の高度な音楽性と作曲技術—音響形成と、その音響の構成的配置（形式形成）の双方における技術—が顕れている。

しかしその一方で、どの作品も、適度な長さの枠の中に「目新しい」音響が無難にデザインされていて、「卒がない」という以上の印象がなく、強い説得力ないし作曲家の強い個性の発露に欠けていた。根本的な問題は、作品の意図の不明確さにある。それは音響自体の提示であるのか、音響の時間的推移が生み出す音楽的時間であるのか。後者なら、その時間の性質は非目的論的なものか、それとも方向性のあるドラマか。あるいはまた、ここでは音響による詩的表現性が目指されているのか否か。申請者は「その音響によって何を為すのか」を自覚的に問う必要がある。

こうした問題や多くの改善点があるとはいえ、申請者が楽器の特性を熟知し、作曲家としての高い技術と音楽性を持つことは確かである。博士の学位の水準に十分に達していると判断できる。

2. 論文審査

本論は、ドイツの現代作曲家ヘルムート・ラッヘンマン（1935-）の独創的な書法を、一作品の緻密な分析を通じて読み解こうとするものである。ラッヘンマンの創作の概要と音楽思想を紹介する第1章に続く第2章、すなわち《動き（硬直の前の）》（1982-83/84）の分析が主たる内容であり、第3章で考察と結論が短く述べられる。

第1章では、音響に対するラッヘンマンの強いこだわりが明らかにされる。作曲家自身が「楽器による具体音楽」と呼ぶ特殊奏法を駆使した書法は、その中核を占めている。しかし、音響の単なる羅列では作品としての体をなさない。複雑多様な音響をいかに配置して形式を生み出し、秩序と一貫性のある全体を提示するのか。第2章はその解明を目指した分析である。その手法は次のとおり。まず、申請者の音楽聴に基づいて32の「音響素」を抽出する。次に、それらを「ピッチ（の有無）」や「長さ」などの6つのパラメーターによって解析し、各セクション・サブセクションの音響素のヴァリエーションを「組成表」として提示する。さらに、その各音響素の関係性を「配置図」で表示する。この膨大な作業の結果、音響間には共通の特徴や類似性が見出され、「予備」や「推移」といったコンテキストや「急・緩・急」の古典的な形式が浮かび上がってきたと申請者は主張する。

本論文に対してはまず、約23分のオーケストラ作品の内実を「音響素」という分析単位を用いて再記述した労作性と、調性から離れた現代音楽の構成手法の一例を示した独自性を高く評価する声が多く審査員から上がった。当該作品の構造の可視化が、特に「附録③全曲分析楽譜」において、一定の成果を上げていることも認められた。

他方、数々の弱点も指摘された。特に重大な問題は次の4点である。第1に、論点先取というべき論文の構造の問題。最終的に示される2つの結論（全体が35に分割されている／各セクション内では音響のあり方が統一されている）は、いずれも申請者が最初に自ら設定したものである。第2に、「聴取による分析」という前提に揺らぎが見られること。例えば、「譜面台の縁を擦る」など、聴取のみからでは正体のわからない音響素が抽出されている。また、結

論部では、音響素の組成表や配置図からは見えてこない事柄が唐突に述べられる。このことは、音響からだけでは捉えることのできない音楽的特徴が、この作品の形式理解には必要であることを示唆する（実際、申請者は緻密な楽譜分析をも行なっている）。そもそも、実際の聴取の様態のみならず、その固有性・恣意性（トップダウン的な分類）について何も説明や方策がないのも問題である。第3に、ラッヘンマンの文章について批判的な考察がなされていない。作曲家の言をそのまま受け取り、十分に消化しないまま議論が展開されるため、論理的な枠組みが著しく弱い。ドイツ語の誤読も多く見られる。第4に、論文の大部分を占める「分析」が、分析というよりは単に楽譜を記号に移し替えた「再記述・翻訳」にすぎない。本来、この作業を土台にして、次の本格的な分析がなされるはずなのに、基礎作業の部分で終わってしまっている。

他にも、「音響という概念の考察が不十分」「結論や得られたデータの表記方法に工夫の余地あり」など、多くの改善点の指摘がなされた。しかし、総合的に見て、本論文は基本的な論文書法をマスターしているうえ、作曲家としての専門的な知見や読譜力を生かして楽譜を粘り強く読み解いている点、難解な対象に対して誠実に向かい合う態度を終始保持した点が高く評価される。

3. 総合審査

修了作品発表会において第一線で活躍する演奏家による好演が実現できたのは、申請者が彼らと良好な信頼関係を築いてきたことの、何よりの証左である。コミュニケーションを大切にする姿勢は申請者の作品の端々にも反映されており、独自の魅力に繋がっている。社交性と謙虚な人柄から学内でも人望が厚く、TA や RA としても活躍した。とりわけ「現代音楽演奏実習」では、演奏会《聴き伝わるもの 聴き伝えるもの》の中心的役割の一端を担った。カールスルーエ音楽大学への交換留学中は、1年間という限られた時間に精力的な活動を行った。学外では、コンクールの受賞、委嘱作品の依頼、海外の演奏会への招聘など、すでに若手作曲家として目覚ましく活躍している。今回の研究を踏まえた、さらなる創作・研究活動が大いに期待できる。よって学位（博士）を与えるにふさわしいと判断する。